手に、客の文を寄合讀に譏る、○略下

〔燕石雜志一〕物の名

唾壺を灰ふきといふは、烟草といふもの渡て後のことならん、灰は烟草の燒殼をいふ歟、

〔煙草考〕烟壺

俗謂灰吹也、以棄烟燼、俗謂吸殼也、漢人此謂烟糞、且以吐唾、其器用唐金或瓷器、長三寸許、大一寸餘、其形容方圓不同、或用青竹筒、以清潔不穢屢易改換也、

〔蜀山百首〕戀

灰吹の青かりしより見そめこし心のたけもうちはたかばや

○按ズルニ、此歌ハ、袋草紙ノ賤夫ノ歌ニ、しぐれする稻荷の山のもみぢばはあをかりしより思ひそめてき、トアルニ據レルナラン、

〔煙草考〕烟具

所謂盒、管、爐、壺、盤也、盒以納縷烟、管以吸烟、爐以貯火、壺以棄烟糞、盤總載四者之器也、又有兼備香箸灰押漢人此謂香抄小羽帚者也、

〔翁草五〕當代奇覽と題せるものに、あらゆる雜談有り、十が一爰に拾ふ、

一寛文の頃迄有し古老の云く、多波粉の渡りしは近き事也、南蠻人、我朝に來て呑初たり、其時は小蠟燭を燈して呑たり、去に仍て日本人も小蠟燭にて呑み、夫より間もなく、世界にはやりもて長ずる事になれり、○中略云かれども今の如く烟草の道具はなし、竹ぎせるとて、細き竹の節を込め、漸火皿程に切、筆の軸程なる物を、夫へ横に付て呑し也、夫さへ持たる人稀也、下々抔は、直に烟草の葉をぐる〳〵と卷、呑口に紙を卷き、火を付て呑たり、大身の大名の烟草飲んと有時、近習小性片手には、つるの付たる火入に火を入れ、脇に小石を置、片手には、唐革の二尺四方程なるを四